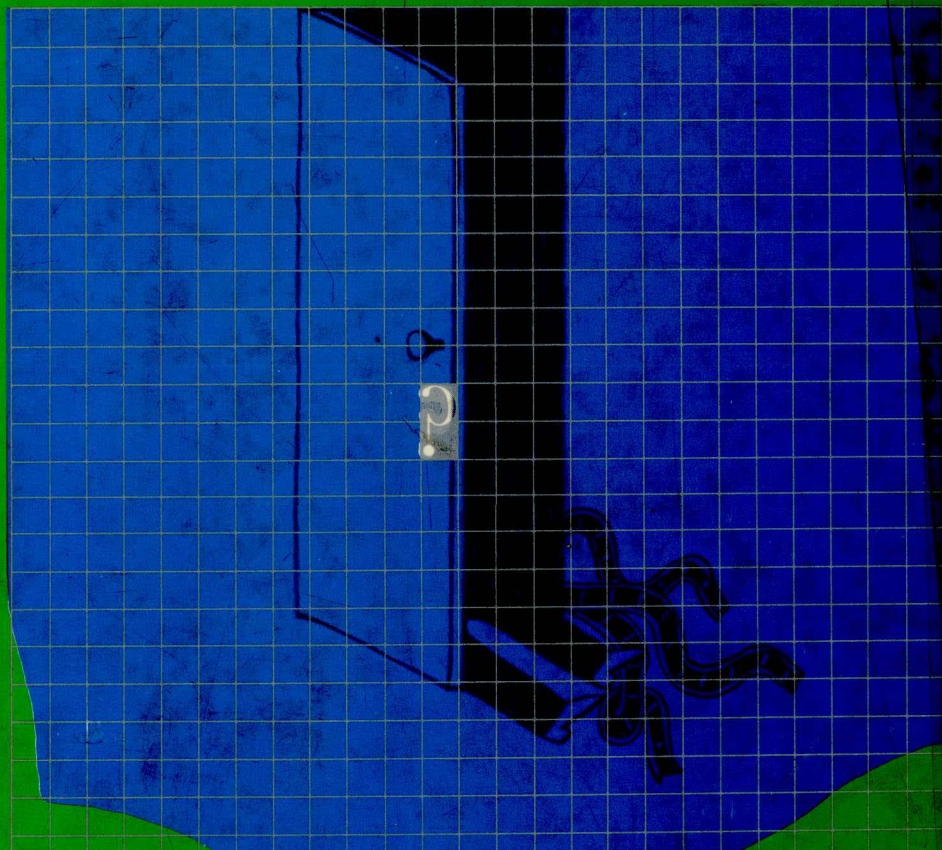


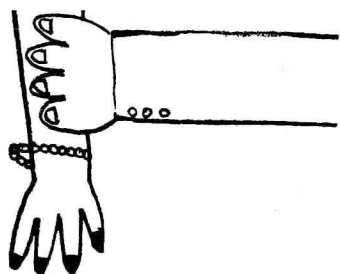
少年少女世界推理文学全集

NO.15 〈ガードナー〉〈ハメット〉

X線カメラのなぞ
マルタの鷹

亀山龍樹訳 あかね書房





?!
《ガードナー》X線カメラのなぞ

《ハメット》マルタの鷹
あかね書房 少年少女世界推理文学全集No.15
亀山竜樹訳 山下勇二

少年少女世界推理文学全集 No. 15

《E・S・ガードナー》

X線カメラのなぞ

1978年4月5日 発行

訳者＝亀山龍樹

発行者＝岡本陸人

本文印刷＝中央精版印刷株式会社

表紙印刷＝錦明印刷株式会社

製本＝有限会社 文麗社

発行所＝株式会社あかね書房

101 東京都千代田区西神田3の2の1

振替東京3-64150番

電話 (263) 0641(代表)

訳者の了解により校印廃止

(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

1965.3©

訳者略歴

亀山龍樹 1922年、佐賀県に生まれ、
東大インド哲学科卒業、現在、創作と
英米文学の翻訳に従事。著訳書に「金
色のワシの秘密」「名探偵ルコック」
「エジプト十字架の秘密」ほか多数。

NDC 933ーシ

少年少女世界推理文学全集 No. 15

あかね書房 1978

203P 21cm

内容：No. 15 X線カメラのなぞ マルタの鷹
(ガードナー ハメット作 亀山龍樹訳)

全国SLA指導 8397-15715-0027

定価はカバー（ケース）に表示してあります



《はじめに》 この本では、ふうがわりな、ふたりの主人公に登場してもらいましょう。

いっぽうのリースくんは、ほんとうは、どろぼうから品物をよこどりするのが専門の、ゆかいな怪盗なのです。大事件発生！ リースは警察をむこうにまわして、ぶっそうな芸当をこころみますが、さて……。

もういっぽうのスピード探偵は、ずうずうしくて、むこういきのつよい男です。スピードは、『くろい鳥という宝が、どこかにあるような、ないような』へんな宝さがしをひきうけます。この仕事をたのんだ客が、これまた、たいへんなくせもの。いったい、どういうことになるでしょう。

どちらも、したたかものの主人公ですが、そこにくりひろげられる世界も、文章のあじわいも、まるでちがいます。みなさんはどちらのほうを、よりす

きになるでしょうね。

亀山龍樹



少年少女世界推理文学全集 No 15 目次

亀山龍樹 訳・山下勇三 絵

《E・S・ガードナー》

X線カメラのなぞ
エックスせん

ダイヤの首かざりがぬすまれた 9

九時二十分ののちに帰った四人 16

ビーバー刑事とアクリー警部補 22
けいじ けいぶほ

写真屋のフランクが、ころされた 26
しゃしんや

刑事が、リースのアリバイを証明 30
けいじ りーす ありばい しょうめい

暗室の床にころがっていたとけい 33
あんしつ ぶか

リースが、へんなことをはじめた 37

女^{おんな}すりをやとい、仕事^{しごと}の相談^{そうだん} 45

本物^{ほんもの}そっくりのにせものができた 50

スカットル、大へまをやらかす 54

警部補^{けいぶほ}に、へんな電話^{でんわ}がかかる 63

あいつだ、あいつをつかまえろ 69

リース、あざやかに事件^{じけん}をとく 78

《S・D・ハメット》

マルタの鷹^{たか}

スピード探偵^{たんてい}とアーチャー探偵 86

やっかいなことになってきた 91

うちあけられないことばかり 101

カイロという男 107

くろい鳥の像に五千ドル 110

鳥打帽子がつけてくる 115

ダンディ警部がつきまとう 120

Gの字 126

ブリジッドのへやをさがす 132

ガットマン 135

ブリジッドがいなくなる 142

くろい鳥のなぞ 146

本日の入港船 155

トム巡査部長 160

茶色ちやいろの紙かみづつみをもってきた男 162

アンチヨ街がい二十六番地ばんち 168

犯人はんじんを、ひとりだけさしだせ 172

事件じけんの真相しんそうを、知らなきやならない 179

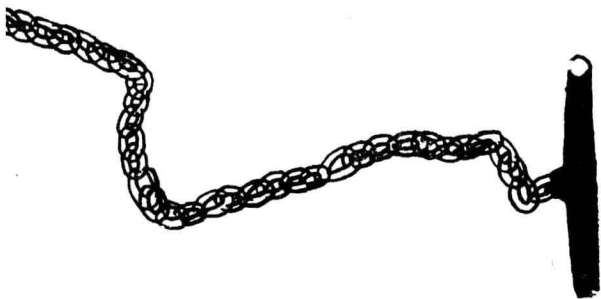
イスタンブールにぎやくもどり 186

きみは、うその名人めいじん 189

少年少女世界推理文学全集

監修 川端康成・中野好夫・阪本一郎
ブックデザイン 沢田重隆・鈴木康行

あかね書房

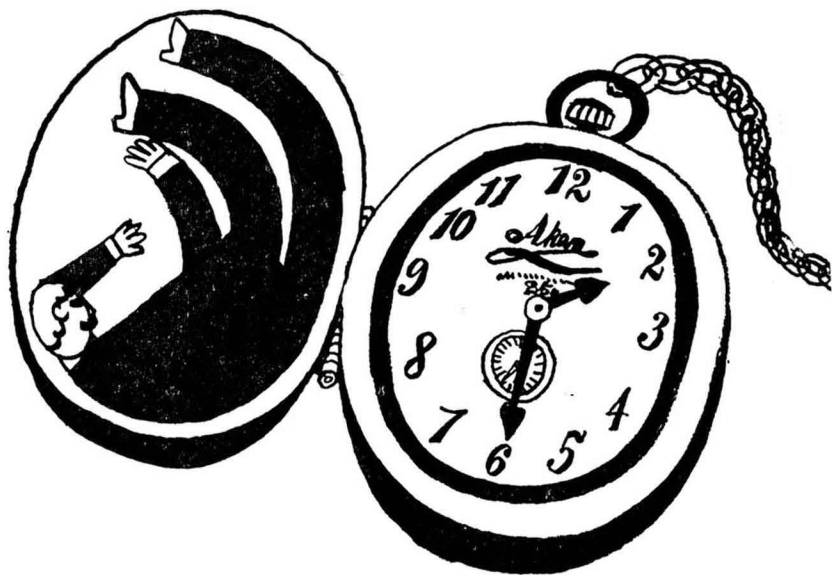


《ガードナー》

エックス
線カメラのなぞ

《ハメット》

マルタの鷹たか





 X線カメラのなぞ（ガードナー）

ダイヤの首かざりがぬすまれた

レスター・リースは、ぜいたくな絹のねまきを着て、大きないすにゆったりとたれていた。テーブルの上の、ぞうげの小箱からたばこを一本とって、火をつけ、ゆっくりとくゆらす。リースは、世にもまれな怪盗で——もちろん、見たところは、そうとはすこしも思われない青年紳士である。

怪盗レスター・リースは、ふつうの人からはなにひとつうばわない。リースの相手は、悪党どもだ。たとえば、『すがたなき犯人、百万ドルをうばう。』というような新聞記事がでていたとする。警察は、やっきになって、その、すがたなき犯人をさがして、さがしくたびれて、足を棒のようにつぶばら

して、しかも、犯人の見当はついていない。そんなとき、レスター・リースは、ちゃんと、犯人の見当をつけて、すがたなき犯人から、ぬすんだ百万ドルをよこどりしてしまふ。そのあとで、リースはかならず、孤児院とか養老院とか、病院とかに、寄付金をおくる。しかし、その寄付金から、手数料として二十パーセントだけひいてある。百万ドルなら、八十万ドル寄付して、二十万ドルがリースのポケットにおさまった。

それが、怪盗紳士レスター・リースのやり口だった。

リースが、ゆっくりとたばこをくゆらししていると、ドアがそと、すこしだけひらいて、ドアのすきまから、人間のかた目がのぞいた。

「スカットル、なにをのぞいているんだー！」

リースに声をかけられて、どぎまぎした顔の大男が、そこからあらわれた。

「だんなさま、おめざめでございましたか。」

この大男も、ただの召使いではない。かれは、アクリー警部補の命令で、警察のスパイとして、怪盗レスター・リースの行動をさぐるために、召使いとして住みこんでいる。ずいぶんながいあいだ、いっしょにくらしているが、さんねん！ かれは、ことあるたびに、リースのしつぽをつかまえそこなつて、はでに、とちつてばかりいた。なんべんかは、もう一步というところまでせまったものの、うまくするりとにげられてしまふのだった。

たばこをすいながらリースは、ねむそうな目で召使いをながめて、

「スカットル、おれは、おまえを見ると、いつもなにかを思ひだすんだが、その思ひだすものが、はっきりしないんだよ。」

召使いである警察のスパイは、はらがたつのをぐっとおさえて、

「だんなさまは、いつも、いろんなじょうだんをおっしゃるので……。わたしが海賊にしているとおっ

しゃって、わたしの本名をいわないで、スカットルという名をつけてしまわれたのも、だんなさまでございますよ。」

天下のビーバー刑事に、海賊のあだ名をつけるとは、なんたること！ 警察のスパイは、このあだ名が、だいきらいだった。

レスター・リースは、にやにやして、

「あつ、そうだ、わかったよ、スカットル。」

「なんでございますか？」

「汽車ボツボの蒸気機関車だよ、スカットル。ばかでかくて、色のくろい、湯気をふきだす機関車だよ、おまえは……。しかも、レールの上をはしる機関車じゃない。ゴムのタイヤをつけた、へんてこりんな機関車だ。」

「わたしが、なんで、ゴムのタイヤ……？」

「おまえが、へやを歩くときには、ちっとも音がしないからね。」

そういうわれて、警察のスパイは、肩をそびやか

し、口をとがらせたが、すぐに思いをあらため、ため息をついて、音もなくへやをよこぎると、へやのすみにある大きな机のひきだしをあけた。そこには、新聞の切りぬきがたくさんしまつてある。

「スカットル。」

と、リースがよんだ。

「はい、だんなさま。」

「切りぬきをしらべなうなつてから、ずいぶんたつね。」

「はい。しばらくおしらべになりませんですね。最近、おもしろい事件がいくつかございますよ。」

「警察の手では、解決できない事件かい？」

「はい。」

「そして、おもしろい事件かい？」

「さようで。なにしろ、たいへん高価な宝石がぬすまれましたのに、警察はまだ、宝石を発見しきらないでいますから、だんなさまにはちょうど、おあつらえむきの……。」

「おい、スカットル、いったい、なんどいつてきかせたらわかるんだい？　ぼくが事件に興味をもつのは、りくつを組みたてて、その力で事件を解決するのがおもしろいからだけのことなんだぞ。だから、じぶんで調査なんかやりはしない。新聞に発表してある報告を研究するだけなんだ。スカットル、おまえがうしろのほうにまわしてかくしているのは、なんだ？」

大男の召使いは、リースのことはおわらないうちに、うしろ手にもった新聞の切りぬきを、テーブルの上においた。リースは、わざと、おおげさな表情をうかべて、

「ずいぶん、手まわしがいいんだね。ちゃんと切りぬきを用意していたのかい。」

スカットルは、とくいそうに目をひからせた。

「はい。だんなさまのお考えになっていることが、すこしはわかるようになりましたので……。」

「これはおどろいた。おまえは、人の心が読みとれ

るのか。読心術をやるような人間が、もしも、ぼんくら警部補のアクリーの部下だったら、警察も犯人をとりがすことなどは、ないだろうにな。」

警察のスパイは、顔をあかくして、口ごもった。

リースは、こまっている大男の召使いを、おもしろそうにながめた。

「スカットル。読心術ができるのなら、おまえには、ぼくの考えもわかりそうなものだ。ぼくは、事件をりくつのうえでとくのが好きだけで、ぬすまれた宝石のゆくえなどはどうでもいいのさ。ところが、アクリー警部補のばかたれは、このぼくが、どろぼうのうわまえをはねると信じこんでいるんだから、こまるよ。いや、こまるといっても、頭のまわりをうるさくとかびまるハエミたいなもので、べつに、いたくもかゆくもないがね。」

大男の召使いは、ひにくな微笑をうかべるリースの顔から目をそらして、

「さようでございますとも。アクリーのようなけち

な警部補に、だんなさまのじやまができるはずはございません。」

「では、スカットル、おもしろそうな事件をえらんでくれないか。」

「かしこまりました。」

警察のスパイは、もっともらしい顔つきで、新聞の切りぬきをめくっていつて、

「だんなさま、こんなのがございます。ハリウッドの映画女優が、仮装ダンス・パーティーをやりましたところが、『アルファベットの首かざり』とよばれているダイヤの首かざりをぬすまれてしまいました。この事件はいかがでしょう?」

「『アルファベットの首かざり』というと、先月だったか、新聞に写真入りで紹介されていた、あいつかい?」

「さようで。なんでも、ブラジルの大富豪が、その女優におくったもので、二十六個のダイヤをちりばめてあるので、『アルファベット』という名がつい

たんだそうでございます。その二十六個のダイヤは、どれもすばらしい上物ばかりで、たいへんな値うちだということです。」

「ふうん、なかなかおもしろそうな事件だな。くわしく話してくれたまえ。」

リースはすわりなおして、あたらしいたばこに火をつけた。ほんとうに興味をひかれたらしい。目がひかっていた。

スカットルは、そうれ、ひっかかってきたぞ、どここそ正体をあばいてやる、と、快心のえみをうかべかけたが、あわてて、なにくわぬ顔にもどり、「これは昨夜おきた、まだあたらしい事件でございますよ、だんなさま。ビバリー・ヒルの宮殿のようなアパートを十二室もかりて住んでいる、女優のエバ・ミッチェルが、昨夜の六時から、仮装パーティーをひらいたのですが……。」

「まってくれ。エバ・ミッチェルというのは、たしか『あらそい』という映画の主役をやった女優だ

な。」

「はい、映画界にはいつてから、日はまだあさいのですが、あの映画でいちやく人気スターになりましたて……。だんなさまはごぞんじですか？」

「いや、映画で見ただけだが、いやにつんとすました、えらぶった女だったよ。まあ、そんなことはどうでもいい。話をつづけてくれ。」

「はい。その仮装パーティーには、三十人ぐらいの客があつまって、大さわぎをはじめたのですが、九時二十分すぎごろ、ミツチエルがひとりきりで、じぶんの居間でひとやすみしているところへ、アラビアの王様の仮装をした男がはいってきて、ピストルをつきつけ、金庫の文字合わせの錠をあけさせたのです。」

「首かざりは、その金庫にはいつていたのか？」

「はい。女優のミツチエルは、『ふしぎの国のアリス』の白ウサギの仮装をしていたので、せっかくの首かざりをかけることができず、金庫へしまってお

いたのだそうです。」

「ふうん。それで、ミツチエルはどうしたんだ？どろぼうが首かざりをぬすんでいくのを、指をくわえて見ていたのか？」

「いいえ、それどころではありません。ミツチエルは衣装だんすのなかにとじこめられ、外から錠をおろされたので、でるにでられず、やく三十分のちに発見されたときには、半死半生のありさまでした。

そのち、金庫のなかをしらべたら、『アルファベットの首かざり』がぬすまれていることがわかったのです。」

「すると、どろぼうが、なにをぬすんだかは、助けだされるまで、わからなかったのかい？」

「はい。どろぼうは、金庫の錠をあけさせるとすぐに、ミツチエルを衣装だんすのなかにおしこんでしまったのですから……。そのように新聞には書いてございます。」

レスター・リースは、しばらくのあいだ、じっと